

書評集について

渡 辺 潤

退任記念号を出していただいたことに感謝します。また、従来の形式に順挙したものではなく、僕のががまを理解していただいたことにも御礼を申し上げます。

退任記念号では通常、「略歴並びに著作目録」が掲載されます。しかし、それに代えて、主な著作についての書評集にすることにしました。ただし、著作内容についてだけでなく、作者や编者である僕と評者の方々ご自身との関係を交えて書いていただくよう依頼しました。きわめて好意的で暖かい文章を書いてくださった皆さんに、心から感謝しておきます。

僕はコミュニケーション学部が大学院修士課程を設置した1999年に東京経済大学に赴任しました。田村紀雄先生がお書きになっているように、「コミュニケーション学研究科」は日本で最初のものでした。注目されて、当初に入学した院生は定員を超えるほどで、僕も毎年複数、それも4人とか5人といった学生の指導を任されることになりました。しかもその中の多くの人が、博士課程への進学を希望しました。学生の多くは、仕事を持ちながら研究もする二足のわらじを履いた人たちでした。当然、ゼミの時間は夜になりました。

博士課程を履修しても、その先の道は厳しいです。僕はそのことを強調して、進学は諦めた方がいいとほとんどの人に話しました。しかしそのたびに、それでもいいから研究を続けたいということばが返ってきました。その結果、一時は修士・博士あわせて10名を超える履修者がいるような状態になりました。しかも、博士課程を終えた後も、院のゼミに出席する人が大勢いて、現役の院生が減るようになって、研究室には大勢の人が集まり続けました。

こんなにたくさんの方が集まって、熱心に研究したがっている。そんな空気を感じてから、僕は自分単独より、ゼミに集まる人たちと一緒に共同研究を中心にやることにしようと思うようになりました。そんな雰囲気については、院の一期生である三浦倫生さんがお書きになっているとおりです。

東京経済大学に移籍した後の僕の研究業績の中で、単著として書籍になったのは、『アイデンティティの音楽』（世界思想社、2000年）と『ライフスタイルとアイデンティティ』（世界思想社、2007年）の2冊だけです。そのほかの『〈実践〉ポピュラー文化を学ぶ人のために』（世界思想社、2005年）、『コミュニケーション・スタディーズ』（世界思想社、2010年）、『『文化系』学生のレポート・卒論術』（青弓社2013年）、『『レジャー・スタディーズ』（世界思想社2015年）はすべて、ゼミに集まる人たちを中心に作ったものです。

書評集について

あるいは『ポピュラー文化論を学ぶ人のために』D. ストリナチ（世界思想社、2003年）と『カルチュラルスタディーズを学ぶ人のために』C. ロジエク（世界思想社2009年）を翻訳した際にも、テキストとして輪読したり、下訳や共訳をしてもらったり、付録として日本の状況を追加した文章を書いてもらったりもしています。

僕ははじめから、研究業績は一部の専門家だけを相手にするものではなく、より広い読者を求めて書くべきものだと考えて、発表してきました。それは当然、内容だけでなく文体の工夫を必要にします。そんな方法を、院に集まった人たちにも要求してきました。そこにはもちろん、大学院を出ても研究職に就くのは厳しいという現状がありましたが、僕や彼、彼女たちが興味を抱く分野は、専門家に閉ざされたものではなく、ごく普通の人でも興味を持つ領域だと考えていたからでした。

書いたものは読まれて初めて完結する。この方針は学部の学生が書く卒業論文でも同じで、ゼミの卒論集を出し続けてきました。退職後もゼミを非常勤講師として担当して、この1月に終刊号として18号が出されました。学生たちにとっては、大学で勉強した証しや記録となるものですが、僕にとっても教員として、学生とどう関わり、どんなことをしてきたのかということを確認する記録になるものでした。

大学は院も学部も、これからますます厳しい時代を迎えることになると思います。それはもちろん、人口減による学生を集めることの難しさや、それに伴う経済的基盤の危機として広く問われていることです。しかも、入学してくる学生たちの目的や目標は、何より就職のためであることがはっきりしています。大学の教員は何より研究者であって、講義やゼミのやり方も研究業績を披露して、学生に学ばせることであっていい。そんな考えはすでにほとんど通用しない世界になっています。

僕は非常勤時代を含めると、40年以上を大学の教員として過ごしてきました。その大半を、自分に興味があることを、自分のペースとやり方で好き勝手にやってきました。そうはいかなくなってきたという実感が、早期退職を決意した一番の理由でした。その意味で、いい時代を過ごさせてもらったという感謝の気持ちで一杯です。しかし同時に、「大学」という世界が、本来どういう場としてあるべきなのか。大学で働く若い人たちには、こんな問いかけを忘れずにいて欲しいと思います。